

藤田幽谷・東湖父子

那珂市歴史民俗資料館

藤田家は、幽谷の曾祖父の代まで飯田村(那珂市)で農業を営んでいたが祖父顕一の代に分家して水戸城下に移り住んだ。

藤田幽谷(1774～1826／写真右『幽谷全集』)は、幼少から勉学に励み神童と称されるほどの人物で、水戸藩「彰考館」総裁の立原翠軒に学び、大日本史の編さんにも当たった。徳川光圀の尊王敬幕の考えを発展させ、家塾「青藍舎」^{せいらんしゃ}を開いて会沢正志斎や豊田天功、子息東湖ら多くの門人を育てた。また、上野国^{こうづけのくに}(群馬県)の高山彦九郎や下野国^{しもつけのくに}(栃木県)の蒲生君平ら尊王の志士たちと交わり尊王思想を鼓舞した。



藤田東湖(1806～1855／写真左「茨城県歴史館パンフレット」)は、水戸藩第9代藩主徳川斉昭の側近として天保の改革を推進し、藩校弘道館の設立に尽力してその館記をまとめ「尊王攘夷」の精神を高めた。また、検地を断行して税の公平化に努め、江戸在住の武士を水戸へ移して(土着)、経費の節約に尽力した。北郡の郡奉行として農村を踏査し農村改革にも力を尽くした。



しかし、社寺改革の行き過ぎなどもあって藩主斉昭が幕府から隠居謹慎の処罰を受けた際、東湖も蟄居謹慎処分を受け受難の時期を迎えたが、その時期に書かれた『常陸帯』^{ひたちおび}、『弘道館記述義』、『回天詩史』は東湖の代表的な著述である。

幕末の江戸在住時代には幕臣の矢部駿河守や川路聖謨をはじめ薩摩藩の西郷隆盛、越前藩の橋本左内ら多くの志士たちと交流し大きな影響を与えた。長州萩の吉田松陰も東湖の著述に感銘を受け松下村塾で教科書に使用したほどであった。安政2年(1855)10月2日、江戸の大地震の際に母親を助けようとして圧死(50歳)、多くの志士たちからその死を惜しまれた。

市内鴻巣の木内(宮本)家は、藤田幽谷の妻となった水戸の丹家と婚姻関係を持っていたことから東湖の尊王思想を崇敬し、醸造銘柄に「菊盛」を命名していると伝えられている。また、東湖の妹雪子は桑原信毅に嫁し、その娘冬(英雄)^{ふゆ}は彰考館総裁豊田天功の長子小太郎と結ばれた。その豊田英雄(日本の保母第1号)は、那珂市東木倉出身の代議士根本正と羽部徳子との媒酌を務めている。

市内飯田字中島の共同墓地内に立つ**藤田幽谷・東湖父子の顕彰碑**(写真右)は、昭和12年(1937)4月29日、日華事変の起こる直前の緊迫した世情の中、幽谷・東湖父子の精神を承けて勇気を鼓舞し国難に対処しようと地元旧芳野村の有志が相談して建てられたものであり、碑の題額は茨城県知事林信夫、撰文は水戸学塾頭の大内逸郎である。

